

『ほつとたいむ通信』 第八十六号

梅雨の晴れ間にのぞく太陽は、もう夏の日差しです。



「お気をつけて」

繁華街を歩いていると、ポケットティッシュを配っている人をよく見かけます。おそろく、「何個配っていくら」という単価のアルバイトなのでしょう。黙々と道行く人にティッシュを手渡しします。

+ + + + + + + +

でも、中には手渡そうとしても受け取らない人もいます。ティッシュを配っている人の姿を認めると、遠巻きに避けて行き過ぎる人もいます。それでは仕事にならないので、一度に2つも3つも渡して、数を稼ぐ人も見かけます。

さて、こんなことがありました。

妻と二人で旅行に出掛けるため、空港に向かったときのことです。荷物が多かったので、やむをえず在来線のターミナル駅までタクシーに乗りました。

駅で車から降りて、重い荷物を抱えてコンコースへ入ろうとすると、ちよつと派手なスーツを着た若い女性ティッシュを配っているのが目に留まりました。

無料なものというのは、なかなか受け取りにくい

ものです。たとえば、それが企業のPRが目的だとかっていても。いつもなら受け取らないことが多いのですが、今回は別。旅先で必要になるかもしれないと思つて手を伸ばしたのでした。

近づいてみて、それが消費者金融の宣伝のためのものであることがわかりました。女性の胸には、会社名の入った名札が付いていました。

パツと受け取ろうとした瞬間、彼女が言いました。

「お一人、一つずつどうぞ」

と微笑んで。すぐ後ろを歩いていた妻も手を伸ばして受け取りました。

ポケットにティッシュをねじ込んで、そのまま通り過ぎようとした時のことです。背中に声をかけられました。

「お気をつけて、行つてらっしゃいませー」

思わず振り返つて、

「はい、ありがとう」

と口にしていました。ティッシュ配りをする人から、こんな声をかけられたのは生まれて初めてでした。

そのお女性と一瞬、目が合いました。お互い笑顔になりました。

妻と顔を見合わせて、何とも言いがたい幸せな気分を味わったのでした。

「毎日が楽しくなる17の物語」より抜粋

株式会社三悦

代表取締役 樋田浩三

令和七年七月